慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日高普著 商業信用と銀行信用
Sub Title	Commercial credit and bank credit, by H. Hidaka
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1967
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.60, No.1 (1967. 1) ,p.110(110)- 116(116)
JaLC DOI	10.14991/001.19670101-0110
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19670101-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現実を合理的に反映しているものであることが望まじい。グをする上、当然なことであるが、その際設定される諸前提は矢張ものであって、この限りでの現実からの遊離はモデル・ビルディン

- える効果 一 一 農業、人口、その他の不均等分布の産業立地パターンにあた
- 口 閉鎖経済から開放経済への移行
- □ 短期分析から長期分析への転換(動態理論の開発)
- 四 空間的配置における最適性の検討

分に発達したものではない。過去の立地論が単なる抽象理論で終っ た最大の理由が、(特に、これはウェーバーの工業立地論にあてはまる を経験的検証が可能な一連の方程式体系へとひきなおすことを試み にデイシーによって、隣接単位法 the nearest neibour method と に提出されたいくつかのモデルとそのもとに導出されたいくつかの ことであるが)それが 理論としてのみ扱われ、 ているが、これらは、いずれもごく最近の動向であり、必ずしも十 命題の検証であろう。 は、ボス自身が次いで強調している経験的調査の充実、特に、本書 的を射たものであろ う。 しかし乍ら、 より一層必要とされること る。これらは今後研究が行われねばならぬ方向として、たしかに、 等が、研究の発展を図るために是非とも必要であると 強調 して 関連において行われ、 レッシュの六角形市場網の統計的検証は、 ベリーもまたクリスターラーの中心地理論 現実との検証を怠っ 既

たためであることからいっても、この側面の開発は特に強調されなたためであることからいっても、この側面の開発は特に強調されなたればならない。この意味で、本書において展開されるティンバーがればならない。この意味で、本書において展開されるティンバーをの論理過程に誤りがない以上、われわれはこれを卒直に認めてやらねばなるまい。この意味で、本書において展開されるティンバー題との間に致命的な乖理があるかないかに依存するのであって、直題との間に致命的な乖理があるかないかに依存するのであって、直題との間に致命的な乖理があるかないかに依存するのであって、直題との間に致命的な乖理があるかないかに依存するのであって、直との間ないし常識的立場からその前提や枠組を云々することはつつしまねばなるまい。この意味で、本書の様な試論に対してわれわれのまねばなるまい。この意味で、本書の様な試論に対してわれわれのとるべき態度として特に忘れてならないことであろう。

(Bos, H. C., Spatial Dispersion of Economic Activity, 1965, Rotterdam Univ. Press. 2, 580 円)

日高普著

『商業信用と銀行信用』

飯田裕康

その基軸となっているものはなにか。この問題は、すでに多くの論『資本論』における信用論が、いかなる構成をとって展開され、

じて、 宇野弘蔵氏によって展開された信用論を、経済学原理論の分配論に を信用論の原型とし、そこでの展開に即した構成を指向 する もの 譲を呼んだものではあるが、いまだに定説とされるべき もの はな 両方の立場にみられる展開の非論理的な側面を、 あたる利子論とみなす見地を基本的に継承している。そのうえで、 とに大別される。本書の著者である日高氏は、後者の立場をとる。 きた。それらは、現行『資本論』の第三部第五篇(利子生み資本論) に構成されうるかという二点をめぐって、今日まで論議がなされて と、それをむしろ批判して、 したとき、なおいくつかの未解決の論点を残しているといえる。総 ものたらしめようという意図が全篇をつらぬいている。 い。とくに、マルクスの「経済学批判体系」プランの変遷等を考慮 こうした状況のもとにあって、信用論は、他の理論と、とり 利潤理論とどう論理的に関連し、 独自の論理を構成すべきだとするもの 内的展開が、 論理的に一貫した かに論理的

用論の基本的論点を確認する方向で、若干のコメントを試みたい。 特殊性。という項目によって内容を構成している。以下においては、 特殊性。という項目によって内容を構成している。以下においては、 という概念。 C、利潤率均等化との関係。 附論、社会科学的方法の という概念。 B、商業信用。 A、 端緒となるもの。 B、 商業信用論の

日高氏は、まず、マルクス『資本論』における信用論(利子論)

とりわけ、第五篇第二十一章におけるマルクスの説明は、資本の概念規定の曖昧さにもとづき、通俗的説明に終止するとする。そりわけ、第五篇第二十一章におけるマルクスの説明は、資本の概念規定の曖昧さにもとづき、通俗的説明に終止するとする。そのでなっていること、位置変換のみおこない、姿態変換をおこないのうえでとくに、利子生み資本の運動、GーGーWーGーGの形式ののえでとくに、利子生み資本の運動、GーGーWーGーGの形式のが、字野弘蔵氏のいわゆる金貸資本的形式と区別のできないものになっていること、位置変換のみおこない、姿態変換をおこないで、これらが、字野氏によって提唱された「資金」の貸借関係であるという点から統一的に把握さるべきことを主張される。マルクあるという点から統一的に把握さるべきことを主張される。マルクあるという点から統一的に把握さるべきことを主張される。マルクあるという点から統一的に把握さるべきことを主張される。マルクという点が資本として商品となる」(Das Kapital, Bd. III. S. 371)という点も、資金の期限付使用価値の商品としての擬制にすぎないとされる。(二五頁)

が、G…Gという位置変換をおこないうる根拠は、資金としての再を示されており、その後、それを受け入れる人々によってくり返してなされており、その後、それを受け入れる人々によってくり返しまであることも否定しえない。利子生み資本の運動形式が、金貸資本的あることも否定しえない。利子生み資本の運動形式が、金貸資本的まると、「資金」とは、 再生産過程中において形成される遊休貨幣よると、「資金」とは、 再生産過程中において形成される遊休貨幣よると、「資金」とは、 再生産過程中において形成される遊休貨幣か、 G…Gという位置変換をおこないうる根拠は、資金としての再次、 G…Gという位置変換をおこないうる根拠は、資金としての再が、 G…Gという位置変換をおこないうる根拠は、資金としての再が、 G…Gという位置変換をおこないうる根拠は、資金としての再が、 G…Gという位置変換をおこないうる根拠は、資金としての再が、 G…Gともである。しかも、この論点が、 マルクス信用主張されている。しかも、 でに字野弘蔵氏によってなされている。

生産過程の中から集積されてきた貨幣Gそれ自体のなかになければ生産過程の中から集積されてきた貨幣Gそれ自体のなかになければ生産過程の中から集積されてきた貨幣Gそれ自体のなかになければ生産過程の中から集積されてきた貨幣Gそれ自体のなかになければ生産過程の中から集積されてきた貨幣Gそれ自体のなかになければ生産過程の中から集積されてきた貨幣Gをれるは、確認されねばならないであろう。資本主義が、これを内的に編成したとき、それが遊休然的に生みだす貨幣としての貨幣である点は、確認されねばならないであろう。資本主義が、これを内的に編成したとき、それが遊休然的に生みだす貨幣としての貨幣である点は、確認されねばならな場合に、この性格を付与するという点が重要なのである。 信用機物神性を通過するところに成立している範疇なので ある。 信用機物神性を通過するところに成立している範疇なので ある。 信用機物神性を通過するところに成立している範疇なので ある。 信用機構は、まさにこの物神性の内容をなしているものと考えねばなら構は、まさにこの物神性の内容をなしているものと考えねばなら構は、まさにこの物神性の内容をなしているものと考えねばなら

信用論の端緒に利子生み資本を説くという 方法は、この 物神性信用論の端緒に利子生み資本を説くということを示しているのであする)ところで、 はじめて論じうるということを示しているのであする)ところで、 はじめて論じうるということを示しているのである。 すなわち、利潤→利子・競争→信用というニつの道程をマルクる。 すなわち、利潤→利子・競争→信用というニカの道程をマルクる。 すなわち、利潤→利子・競争→信用というニカの道程をマルクスは用意しているし、それ以外に信用論が展開される方法は存在しスは用意しているし、それ以外に信用論が展開される方法は存在しる。 すなわち、利潤→利子・競争→信用という方法は、 この 物神性

さらにその条件を新たな水準に引きあげてゆく可能性を有している 競争場裡で形成される再生産条件に規定されており、信用関係が、 者によって批判された所説と大同小異である。自己資本の蓄積が、 ぎず云々」(二〇六頁)といった抽象的理解では、この問題について著 用の利用は、あくまで自己資本の蓄積を促進する役割を果たすにす 連関が、マ たんに形態的にとらえられるのではなく、「実体」(二〇六頁) こそ信用論の中心的課題であって、それゆえに、信用関係自体が、 を得ようとする機構として信用制度は構成されるのである。 をこえたところで形成される必然性をものがたる。競争は、資本に 潤率が均等化する傾向は、諸資本の再生産条件が、諸資本の個別性 点を軸にしなければ、この問題は解けたといいえないであろう。 二大槓杆の相互の関連性を 問題にしてのことなのである。「銀行信 媒介するといわれているのは、本来、競争と信用という資本蓄積の くかかわるものとしなければならないのである。 って、信用が競争関係と絡み合い、それを疎外してゆく過程、これ 一様な条件となる。これを再び個別的に打開して自己に有利な条件 ルクスの第五篇、第二十七章の資本制生産における信

=

きない。産業資本相互の信用関係を想定したうえで利子論は展開さ論の端緒は、マルクスのごとく、利子生み資本から始めることはで著者によれば、すでにみたところからもあきらかなとおり、利子

信用が、まず、とりあげられる。れることになる。したがって、産業資本相互の信用関係である商業

定を手掛かりに、相互性と遊休資金利用が、両立し難いことをあき 金を相互に融通することによって、そうでない場合には無用に遊休 拠として強調する。 らかにする。商業信用の利益は、一方では遊休資金であり、他方で 権・債務関係連鎖の両端で遊休資金の融通がなされうることをあき らかにし、さらに相互性をなりたたしめる 信用関係の 積極面 とし せしめることになる 資 金 を、 生産過程に資本として投ぜしめる、 利潤の根源をなす剰余価値の生産に直接役立たない種々なる遊休資 るともいうことはできない」(七二頁)といわれるごとく、従来商業 にでてくる、 は、資本の商品資本だとされ(九二頁)、個別資本相互の関係のなか 一九五二年、 こで、宇野弘蔵氏の「要するに商業信用は個々の産業資本が、その る根拠を、産業資本の運動との関連においてつかもうとされる。 信用をめぐっておこなわれた議論から一歩でて、商業信用が成立す わば個別資本間の相互扶助関係に外ならない。」(『経済原論』下、 「信用売りをもって、貨幣の貸付けであるとも商品の貸付けで あ 現金でならばうれないものを手形でうるという関係を軸に、 岩波書店、二四〇―一頁)という商業信用にかんする規 流通期間(販売期間)の不確定性を 信用関係展開の根 債 そ

係の契機になってくる。しかしながら、信用関係を前提にしての流考えられる日高氏にとって、 販売期間(流通期間)は 重要な信用関ー 商業信用が一方で、 商品資本の 生産資本化の要因(一〇七頁)と

生産資本化されうるかいなかに、むしろかかっているというべきだ 規定してくるのは、流通時間なき流通であり、生産の不断の継続と 含めて、手形の期限の設定という形で一応問題は機構的に解決され において、 価値の実現にかかわる点からするなら、その商品の市場価格の決定 的に規定されてくる問題である。とくに、それは生産された商品の 通期間は、原理論的には、再生産の循環過程の一環として、 なものなのであろうか。 ろう。また、遊休資金の融通という点においても、その意義は明白 括しているとみなくてはならない。ここでの問題は、商業手形が、 のとする。したがって、流通期間は、信用関係に密接に結びつくと というかたちで、この信用関係を産業資本運動にとって不可欠なも れている商業手形に、より広範な流動性を与える機構を必然化する いう産業資本の要請である。この要請が、本来個別資本的に制約さ に過程それ自体から形成されてくるのであって、むしろ商業信用 ているものと考えなければならない。そのために予備資本が必然的 しても、単に、産業資本家相互間で調整しえない関係への展開を包 商品資本の生産資本化をさまたげる価格変動の危険等を 総過程

という関係にならなければならない。そのさい、Bの手もとに遊休る。それに対して、Bは、自らの予備資本をもって、Aに融通したた。したがって、ここでは、当然、その分だけ生産資本に合体された。したがって、ここでは、当然、その分だけ生産資本に合体された。したがって、ここでは、当然、その分だけ生産資本に合体された。したがって、ここでは、当然、そのさい、Bの手もとに遊休という関係にならない。

所第二の要件も、十分なものとはいえなくなってしまう。 用第二の要件も、十分なものとはいえなくなってしまう。 用第二の要件も、十分なものとはいえなくなってしまう。 用第二の要件も、十分なものとはいえなくなってしまう。

使用価値」にたいする対価だとした場合、商業信用において遊休資 はできないであろう。 金が融通される両端の場合にのみ利子成立の根拠をみるということ よいのだろうか。 利子は、日高氏ののべるごとく、 日高氏のように、商業信用 の成立を証明するものとしてのべられたわけではない。利子の量的 価格との差額だとされているが、これはマルクスにおいても、 なノルムを示したものにすぎない。日高氏の述べられるごとく、利 商業信用の利子は、信用による場合の価格と、現金で買う場合の る。信用関係が資金の貸借であるかどうかはっきりしない場合、 信用関係が貸借関係からなりたっていることに根拠を有して 段階においてみられる。あるいは、 両端における関係は、その信用連鎖過程の個 の利子の存在をあいまいにしてしまって そうした関係の擬制 「資金の期限付 利子

ない。 というでは、利子支払を義務づけているとみなければならのでも、利子支払を義務づけているとみなければなら債権・債務関係をおしつける。だから、手形の流通は、それがどのがなければならない。商業手形の支払は、裏書譲渡当事者すべてに

体を、 連性を有している。というのは、利子は、貸借関係が成立するさ だすのである。いわゆる手形の擬制的資本としての性格は、 務関係に規定されつつ、流通する手形の性格それ自体に根拠をみ のである。すなわち、商業信用における利子は、そこでの債権・債 業信用連鎖は、 個別資本的制限を克服するような方向を与えねばならなくする。 一般と観念されるからなのであって、そのことが、手形それ自体に の一定の基準をもって計られるからである。ここでは、その関係が の個別資本的制限も、克服されつつあるのである。 い)の投下形態たらしめるのである。これによって、 いかに個別資本的であっても、そこで融通されるものは、 むろん、 利子生み 資本(あるいは日高氏のとおり「資金」といってもよ この関係は、商業信用のみによっては把握し切れない したがって、必然的に銀行信用を導かざるをえない 商業信用関係 貨幣資本

70

は、商業信用から展開されるものではあるが、商業信用をも包含し銀行信用は信用関係の中心をなしている。した がっ て、銀行信用を中心とする資金の貸借関係である。(二五頁)といわれるように、「資本主義社会における資金の貸借関係は、 いうまでもなく 銀行

た信用関係の中心として、考えられねばならないはずである。それた信用関係の中心として、考えられねばならないはずである。それた信用関係の中心として、考えられねばならないはずである。それた信用関係の中心として、考えられねばならないはずである。それた信用関係の中心として、考えられねばならないはずである。それた信用関係の中心として、考えられねばならないはずである。それた信用関係の中心として、考えられねばならないはずである。それた信用関係の中心として、考えられねばならないはずである。それた信用関係の中心として、考えられねばならないはずである。それた信用関係の中心として、考えられねばならないはずである。それた信用関係の中心として、考えられねばならないはずである。それた信用関係の中心として、考えられねばならないはずである。それた信用関係の中心として、考えられねばならないはずである。それた信用関係の中心として、考えられねばならないはずである。それた信用関係の中心として、考えられねばならないはずである。それた信用関係の中心として、考えられねばならないはずである。それた信用関係の中心として、考えられねばならないはずである。

置くという日高氏のさきの主張と対応している。 「産業資本は本来純粋の流通費用を負担しなければならない の だ「産業資本は本来純粋の流通費用を負担しなければならない の だ

生み資本を取扱うという、銀行資本の基本性格をあきらかにしよう明をしたり、あるいは、論理的不備を避けるがためではない。利子信用の説明に、この貨幣取扱資本を援用するのは、歴史的に補足説がローチを統一したと考えられている。マルクスが銀行資本・銀行排除し、論理的に銀行資本と結びつけられ、銀行信用への二筋のア非除し、論理的に銀行資本と結びつけられ、銀行信用への二筋のア

範囲をはるかにこえたところで、自己を再生産している。 をするためである。日高氏のように、純粋な流通費用の自立化とし とするためである。日高氏のように、純粋な流通費用の自立化とし とするためである。日高氏のように、純粋な流通費用の自立化とし とするためである。日高氏のように、純粋な流通費用の自立化とし とするためである。日高氏のように、純粋な流通費用の自立化とし とするためである。日高氏のように、純粋な流通費用の自立化とし

では、 さて銀行資本は、純粋流通費用の一部(?)である信用関係費用の独立化という把握は妥当であろうか。こうした信用度とか信用調の独立化という把握は妥当であろうか。こうした信用度とか信用調の独立化という把握は妥当であろうか。こうした信用度とか信用調の独立化という把握は妥当であろうか。こうした信用度とか信用調の独立化という把握は妥当であろう。さきに指摘したとおり、遊休立の根拠は求められるべきであろう。さきに指摘したとおり、遊休立の根拠は求められるべきであろう。さきに指摘したとおり、遊休立の根拠は求められるべきであろう。さきに指摘したとおり、遊休立の根拠は求められるべきであろう。さきに指摘したとおり、遊休立の根拠は求められるべきであろう。さきに指摘したとおり、遊休立の根拠は求められるべきであろう。さきに指摘したとおり、遊休立の根拠は求められるべきであろう。さきに指摘したとおり、遊休立の根拠によって集中され、利用されることは当然といわねばなら、 である信用関係費用さて銀行資本は、純粋流通費用の一部(?)である信用関係費用さて銀行資本は、純粋流通費用の一部(?)である信用関係費用さて銀行資本は、純粋流通費用の一部(?)である信用関係費用さて銀行資本は、

外の問題として片づけることができるのであろうか。 業信用自体の位置や役割もことならざるをえない。このような観点 にしても、 増々稀薄となってゆかないであろうか。たとえば、商業信用の利子 とめるように、 用を信用関係と結びつけるその内容は、日高氏と同じ立場にたつ人 ろう。また、その点にかんしてとりわけ新しい点はないが、 をおこなっているのであるが、積極的論点は、産業資本の流通過程 々の注意を引く問題ではなかろうか。こうした方向は、著者自身み 本書は、従来の諸説明にたいして、きわめて詳細に文義的な詮索 しかし、資本制生産の「実体」との関連を求めるべき論理性は 資本制信用関係が、根拠としてもつという点に集約されるであ 日高氏の場合いかに理解しておられるのであろうか。原理論の 本質的にことなった規定性を与えられるであろうし、商 銀行信用が確立し、貨幣市場で統一的利子率が成立して 形態論的に問題を掘りさげることはできる で あろ 流通費

(青木書店・一九六六年九月刊・A5・二三二頁・九五〇円)

新刊紹介

大西昭著

『低開発国の経済開発』

経済学は"haves and have-nots"の問題を中心に展開してきたとする見方がある。この見方に沿っていうならば、嘗ては国内経済にんの対象であった。しかし、今日では視野が心の対象であった。しかし、今日では視野があるように思われる。

得ない「千年王国」の夢にすぎない。 がのどこにも存在しないとしても、一部の先此ささか緩和され、すくなくとも変質しつつあることを否めない。 これに対して、「豊かあることを否めない。 これに対して、「豊かあることを否めない。

世界」である。嘗てこの「世界」は迂遠で、全人口の七割が飢餓線上を彷徨する「貧しい実際、われわれが投げ込まれているのは、

所以である。 所以である。 所以である。 所以である。 所以である。 所以である。 所以である。 所以である。 の問題が経済学への最大の挑戦に擬せられる。 の問題が経済学への最大の挑戦に擬せられる。 の問題が経済学への最大の挑戦に擬せられる。 の問題が経済学への最大の挑戦に擬せられる。 の問題が経済学への最大の挑戦に擬せられる。 の問題が経済学への最大の挑戦に擬せられる。 の問題が経済学への最大の挑戦に擬せられる。

というわけで、近頃、低開発国(have-nota)というわけで、近頃、低開発国(have-nota)を論じた文献のストックは加速度的にふくれな一石ではあるが、多年この方面の文献を渉な一石ではあるが、多年この方面の文献を渉な一石ではあるが、多年この方面の文献を渉な一石ではあるが、多年この方面の文献を渉な一石ではあるが、ある。著者にいわせればずさわられた著者の手になるだけにとりわけずさわられた著者の手になるだけにとりわけで、近頃、低開発国(have-nota)というわけで、近頃、低開発国(have-nota)というわけで、近頃、低開発国(have-nota)というわけで、近頃、低開発国(have-nota)というわけで、近頃、低開発国(have-nota)というわけで、近頃、低開発国(have-nota)というわけで、近頃、低開発国(have-nota)というわけで、近頃、近頃、低開発国(have-nota)というわけで、近頃、低開発国(have-nota)というわけで、近頃、低開発国(have-nota)というわけで、近頃、低開発国(have-nota)というわけで、近頃、低開発国(have-nota)というかは、

ラ・ミントの『開発途上国経済学、四、二重経済分析と政策』、三、開発理論の類型化――程論の一般化――バウアーの『低開発諸国の理論の一般化――バウアーの『低開発諸国の理論の一般に一一、開発をはいる。一、戦後におけ

国の地域経済統合の理論と現実。
国の地域経済統合の理論と現実。
と域内貿易の長期展望、七、開発途上国の経済開発と対外援助、八、アジア低開発地域の接助必要額の推計、九、日本の経済発展と対外援助負担、一〇、ビルマに対する東西の経済・技術協力の歴史的経験、五、ビルマの経済計構造と経済開発の戦略、五、ビルマの経済計

このうち、一~三章は従来の文献の整理とれている。初学者が問題と文献の所在を知るための好個の手引となるにちがの所在を知るための好個の手引となるにちがいない。四章以下、著者自身の諸種の貢献をいない。四章は下、著者自身の諸種の貢献をいない。四章は著書のビルマ経済研究の成果であり、七、一一章は外国援助と地域経済果であり、七、一一章は外国援助と地域経済のたる。しかし、本書の特徴はむしろ四、六、いる。しかし、本書の特徴はむしろ四、六、いる。しかし、本書の特徴はむしろ四、六、いる。しかし、本書の特徴はむしろ四、六、かる。しかし、本書の特徴はむしろ四、六、かる。しかし、本書の特徴はむしろ四、六、かる。しかし、本書の特徴はむしろ四、六、本書の特徴はむしろ四、六、本書の特徴はむしろ四、六、本書の特徴はむしろ四、六、本書の特徴はむしろ四、六、本書の特徴はない。

望あり、書評あり、時論あり、さては計量あ以上でも判るように、全体として、文献展

刊紹介

一七 二七